

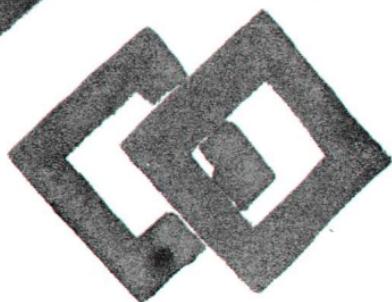
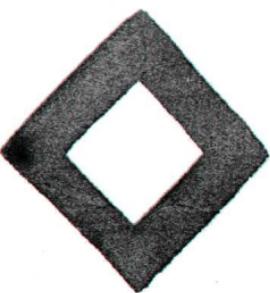
芝
櫻



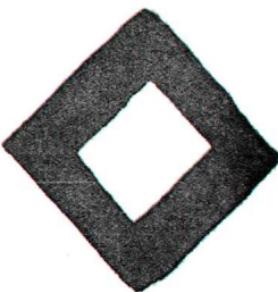
芝

相
士

上
卷



有吉佐和子



新潮社

芝櫻
じはざくら
上巻

昭和四十五年八月二十五日印刷
昭和四十五年八月三十日發行

定価六〇〇円

著者 有吉佐和子

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

東京都新宿区矢来町七十一 郵便番号 一六二
電話東京〇三(26)二二(大代)振替東京八〇八

印刷 株式会社金羊社
製本 新宿加藤製本所

© Sawako Ariyoshi 1970 Tokyo
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

芝 櫻 上卷・目次

第一 章 芝 櫻

第二 章 ま だ ら 猫

裝題
画字
原町
万千春草
子

芝

櫻

上卷

第一
章
芝

桜

足袋の袋をのせて、正子は真剣な顔で右手に小さな手網を持ち、左手で小さな金盥を擗まえながら、泳いでいる金魚に狙いをつけた。晚春とはいっても、まだ水は冷たい。だが踊りの稽古の帰り道だったから、正子の躰は火照つていて、だから金魚を掬うにも踊りのときの鬪志が残っている。縁日の賑わいの中で、金魚屋はまだちょっと季節が早いせいかこの店が一つあるだけで、四角い生け簀の中でも泳いでいる金魚も豪勢なものは少なかった。黒い小さな魚が多いのである。黒の出目金はまるで醜女のようだ。班の出目金も混じっていた。だが正子は、そういう屑のような金魚には目もくれずに、数は少ないがその大きさと鮮やかな緋の色で、水の中では一際目に立つ大物に狙いをすえていた。

手に持った手網は、針金で作った輪に薄い和紙を張つたものである。輪の直径は二寸もなくて、正子が追う金魚の身長より小さい。だから正子が獲物を掬い上げると、たちまち金魚は身悶えして濡れた薄紙を破つて水の中に逃げてしまつた。正子は形のいい小さな唇を噛むと、小銭入れから五銭玉を金魚屋に渡して、また新しい手網を三本買い、美しい眼で赤い金魚を追いまわした。正子は決して不器用な娘ではない。踊りだって、清元だって、師匠が将来有望だと本気で期待しているほど勘がいいのである。だが何分にも狙いをつける金魚が大きすぎた。それはほんの数

四、金魚屋が見た目の景気づけに入れてある金魚だった。縁日に群がって来る子供たちでさえ、この網である金魚は無理だと判断して決して追いかけない。それを正子は意地のように掬い続けて、どの網もたちまち破いてしまい、またたくうちに一円も使い果してから、ようやく諦めたのか、その割にはあまり口惜しそうな顔もせずに立上った。

「よすの？ 正ちゃんは、まあもつたいない」

それまで手も出さずに黙って見ていた鳶代が、そう言いながらすると正子と居所替りをして、正子が投げ捨てるように脇へ積んでいた破れた網を手にとると、破れ残っている紙の端を水に浸し、ひょいひょいひょいと小器用に小柄な金魚を掬つては金盥の水の中に投げ入れた。

金魚屋はそれを見ても咎めなかつた。何しろ正子がまるで無駄に大金を払つた後なのである。

白米が一升五十錢になつて全国的な米騒動が起つてゐる時代である。こんな氣前のいいお客様はどこの縁日でも滅多にあるものではなかつた。首に古手拭を巻きつけた彼は、黙つて木槽の隅で腹を上にして死んだ金魚を掬い出しては足許に捨ててゐた。水の冷たさと非情な客の手で追いまわされて、何匹かの金魚は疲れて死ぬ。

鳶代は素早くその様子を見てとると、手網を置いて金魚屋に声をかけた。

「小父さん、その金魚はどうするの？」

「どうするつて、御縁日に、このままこゝへ捨ててもおけねえ。あとで始末しまさあ」

「それ、頂戴」

「え？」

「可哀そだもん、私がお供養するわ。何かに包んで頂戴よ。そのかわり、この掬つた分はいら
ないから」

鳶代の左手が掘んでいる小さな金盥の中で、小さな不器量ものの金魚が五匹泳いでいた。金魚屋の足許には六匹の死骸が土の上に惨めに打ち重なっている。金魚屋は桃割れに結った美少女の思いがけない申入れに驚いて、しばらく戸惑っていたが、やがて鳶代の一重瞼の下から輝く黒い鋭い目に抗えなくなつたように、古新聞の切れ端で死んだ金魚をくるむと、「すまないねえ。だけど若いのに感心だねえ。へい、毎度ありイ」と言いながら鳶代に手渡した。若い娘といつても二人とも濃く衿白粉を塗っていたし、金遣いの荒さからも素人家の娘たちとは彼も思わなかつただろう。

正子はもう先に金魚屋を離れて歩き出していたが、人混みの中で鳶代が追いつくと小さく眉をひそめて、「やだわ、そんなものをお鳶ちゃん、どうする気なの?」と訊いた。

お供養だ、可哀そうだと言えば、心の優しい感心な子だと思われるのはきまつてゐるけれども、現実には死んだ金魚など、始末に困るものとしか思えない。

「うん、お墓を作つたげようと思つてね。金魚のお墓をさ」「どこへ?」

「津川家の前庭に」

「お姫さんに叱られないかしら」

「だってお供養だもの、叱られないわよ」

「そうかしら」

「そうだわよ。怒つたとしても、作ったお墓を掘り返せとは言わないわ」

そう言えばその通りかもしない、と正子は少し感心した。津川家へ入ったばかりの頃、お姐さんが正子に耳打ちをして、「葛代には氣をおつけ」と言つたのを思い出す。こういう具合に先廻りして考える性質では、目上の者から見れば小面憎いのかもしれない。

「正ちゃん、ちょっと待つてよ」

縁日の賑わいの外れに植木屋が並んでいた。綺麗に花をつけた木瓜の盆栽などを売つてゐる。桜は終つたばかりだが、他の花々は季節を迎えてゐるので、この一画は正子などには珍しいものが咲き群れていた。今日のために苦心して花を保たせたり急がせたりしたのであらうか。木瓜から躊躇まで、晩春から夏にかけての花が一度に開いてゐる。金魚屋ではあまり氣のない顔で正子の抱うのを眺めていた葛代が、ここでは眼を輝かせて、一鉢一鉢を丹念に見てまわつた。ちょっと目馴れないものの前になると、

「小父さん、これ、なんての？ ふうん、何をやつて育てるの？ やっぱり油粕ね。この鉢は、おいくら？ こつちは？」

植木や花の名を訊き、施肥の方法から値段まで一々訊いてまわる。

正子はだんだんいらしてきた。葛代はどの花も念入りに眺めまわし、細かいことを売手に問い合わせながら、一向に買う気配がないのだ。正子は生れついて商人をひやかすということのできないタチで、縁日に店を張る以上は売るのが目的で、何を買う気もないのがいつまでうろいろしているのは相手に迷惑ではないかと思つてしまふ。

「お葛ちゃん、もう帰りましょうよ」

「うん。でも、ちょっと待つて」

「買う気もないんでしょう？ あんまり道草を喰うと、お姉さんに叱られるわよ」

「大丈夫よ、小勘お師匠さんとこでうんと絞られてたって言えば」

「私、先に帰るわ」

「まあ待つてよ。ちょっと御覧な、月が替つただけで花の数が先月の倍できかないんだから。見てるだけで楽しいじゃないの」

鳴代は一重瞼の美しい眼を細めて、うつとりと小さな花々に見惚れているのだった。その横顔を見ていて、正子は急きたてたことを少々後悔した。津川家のお姉さんはああ言つたけれど、鳴代が花を眺めて放心している様子には外連みなどはないのだ。こんなに花が好きな鳴代が、気を許さずに交際すべき相手とは思えない。お鳴ちゃんは、きっといい人に違いない。ただ少々知恵が先走るだけなんだわ、と正子は考えていた。

連翹の花の前で、しばらく鳴代は立止つていて、正子を顧みると、

「ねえ、どうオ。一つだって花が凋れていないのよ。こんなに根元から枝先まで、びっしり花をつけて一度に咲かせるなんて、大層な丹精だわよ。見事だわねえ」

そう言われて見れば、なるほど目の前の植木鉢には、黄金色の塔が立ったように連翹が一杯に花を開いていた。草木にはあまり興味のない正子でさえ一瞬これは買って帰ろうかと思つたほどである。

「おじさん、これ、いくら？まあ一円五十銭、これが？ 安いわねえ」

あれだけ手放しで褒めて感嘆していたのだから、それに安いと言つてはいるのだから、今度こそ買うちと思つたのに、鳴代は値段を訊くとすぐ連翹の前を離れて、隣の店の黄素馨の前で躊躇してしまった。左手に足袋の袋を提げ、右手には死んだ金魚をくるんだものを後生大事に捧げている。

正子はまたじりじりしてきた。正子は性急なのである。今日はお約束があるのでから、早く帰つて髪を撫でつけたり、化粧をしたり、着替えたり、しなければならないのだ。正子は雛妓と呼ばれて津川家でもまだ一人前の扱いは受けていない身分だけれども、身だしなみにはじっくり時間と手間をかけなくてはいい芸者になれないことをもうわきまえていた。葛代のこんな調子につきあつていたら、帰つてから支度に随分慌てなければならなくなる。

「お葛ちゃん、やつぱり私は先に帰るわね」

言い切つたつもりだったが、葛代は顔を上げると、

「まあ待つてよ、どれを買おうかって迷つてるんだから、急かせないで頂戴よ。下手して買いつ

こなつたら恨むわよ、正ちゃん」

と、からみつくよう言うのだ。

そう言われば急かせては悪いようでもあり、津川家では葛代は正子より年も上だし先輩なのである。買う気はあると言うのだし、買ひそこなつたら恨むとまで言われては、切り花でなくて春の終りに根のあるものを買うのだから、確かに後々まで恨まれるだろう。正子は口を噤んだ。それにしても、たかが植木を買うぐらいのことで、後で恨むわよとは凄いことを言う。正子は少少鼻白んだ。が、こうなつては待たないわけにはいかない。

葛代はそれから立つたり、鉢の前に躊躇りしながら時間をかけ、それから一番先の植木屋に戻り、隅つこの箱の中につくねてある小さな草花を指した。

「おじさん、その芝桜は、いくらだっけ」

「一株、五錢だよ」

『そう、じゃそれ、三つ頂戴な』

「三つ、白かね、桃色かね」

「鵝色のがいいわ。あ、それじゃなくて、端っここの、そう可哀そくなつての頂戴よ、それ三つ」

「これなら三十銭にまけとくよ」

「ありがと。油粕をやればいいのね」

「ああ、油粕は一袋三銭だよ」

濃い桃色の花が、端の方で凋れているのを三かたまり植木屋は節だった手の先で古新聞に包んで葛代に渡した。葛代は急いで足袋入れを脇の下に挟んで左手で芝桜を抱きかかえ、右手には死んだ金魚の包みを持って両手のふさがつたところで正子を振り返り、

「正ちゃん、ちょっと十銭貸しといて」

と軽く言った。

ようやく帰ると正子は心急いて、言われるままに小さなガマ口から十銭玉をつまみ出して植木屋に渡した。そのまに葛代はすいすいと先に歩き出した。足袋入れに芝桜に死んだ金魚と妙なものがぱかり持っているのに、葛代はばかりに姿勢がいい。芸者になるために少女がまず最初に仕込まれるのはいつもピンとどこかに錐さきを刺し込んだようないい姿勢を保つていていた。正子は小柄なので胸を張っても人の倍も力まなければならなかつたが、葛代はかなり上背のある方なので、そうして歩くところを見ると、まだ雛妓とは思えないほど大人びて見える。正子は少しばかり見惚れて、それから急いで後を追つた。

連翹の「円五十銭を安いと言つた後で、買ったのは十銭の芝桜かと思うと、なんだかおかしかった。それもほんの三つか四つ凋れかかった侘しい花がついているだけのものである。びっしり花のついた連翹を見たあとだけに、その対照が奇妙だった。私だったら頼まれたって買わない花

だ、と正子は思った。掬えないと分っていても大きい金魚を追うのが正子の方は趣味なのである。

正子と鳶代の帰る津川家は、土地では抱えを十五人も持った大所の芸者屋わきやであった。裏口まで来るとき鳶代が立止つて、「正ちゃん、足袋入れだけ持つて上つてくれない?」

「今から花を植えるの?」

「うん、手の汚れついでだから」

脇に挟んだ足袋入れを正子に取らせると、踵きびすを返して表玄関の方へまわつて行つてしまつた。

「ただいま帰りました」

お姐さんの部屋の前で、よく拭きこんである廊下に坐つて手をつくと、開け放した部屋の中で都新聞を拝げて読める字だけひろい読みしていた阿あや八姐さんが振返り、「おかえり、鳶代は一緒じゃなかつたのかい?」と訊いた。

「一緒に帰りました」

「どこにいるのさ、いないじゃないの。ちょっとでも眼の離せない子だねえ」

阿や八姐さんが鳶代を心許せないと思つて色をつけて見るのはよくないことだと正子は判断したから、ついかばいだしてたくなつていた。

「違います。花を植えているんです」

「花を?」

阿や八が訊き返した。眼尻が切れていて昔はどんなに美しかつたろうかと溜息ためいきが出そになるような顔をしている。